
体育系美術部の滑稽な世界末

和歌 メザシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

体育系美術部の滑稽な世界末

【Nコード】

N3694BA

【作者名】

和歌 メザシ

【あらすじ】

この物語は、現代より文化が進み、強大になった迎撃部隊が一般高校に混じり、様々な結末を迎える単純明快痛快爽快なお話。きつと貴方がページをめくっていく度薄れていく好奇心、それは多分、物語の住人がこちらに来るのを拒んでいる証拠。

貴方はこれに勝つことができますか？それとも、道半ば、力尽きてしまうのですか。

そんな、ただそれだけのお話。このお話がファンタジーなのかSFなのか、悲劇なのか、喜劇なのか。決める権利は私ではなく、貴方

にあります。多分。という自己満足の塊です。厨二です。主人
公多数…登場人物紹介って、入れたほうがいいのでしょうか…。
ジャンルキマンネ…。

【第零部】世界観（前書き）

亀更新、推敲は浅めです。ごめんなさい。

【第零部】世界観

地球に似たようであつた、全く違つた世界にて。

そこでは地球とまつたく同じような世界が展開されており、こくこくと人々は街を、技術を、世界を発展させていた。

が。

そこに私たちのブラックホールの対となる存在、星が生まれるときに生成されるとされるホワイトホールが近づく。

ホワイトホールは別名生み出す者とされており、これまたブラックホールが”飲み込む”行為をすることでしているならば、ホワイトホールは”生み出す”行為をする。これだけ聞けば無害なように聞こえるが、実際はホワイトホールは移動し、対となるブラックホールの飲み込む行為、もとい食事の餌食になる獲物を探している。獲物、というのは勿論星のことであり、ホワイトホールは獲物とした星をブラックホールに与えるために、魚の鱗をはぐように下準備をする。そう、掃除をするのだ。何故このような行為をするのか、意思があるのかなど不明な点は多々あるのだが、一つだけ分かったのは、片方が消滅すると、もう一方も直に消滅する、ということだった。

木々や生き物を食らう、穢れた存在の人間は、魚に例えるなら鱗のような存在だ。その鱗をすべて【取る】。それがホワイトホールの生み出す理由だ。……というのも、ホワイトホールは星を生み出す訳ではないのだ。それができればきっと、ブラックホールのえさを探する必要などない。ホワイトホールが生み出すモノ、それは、狩りをするための道具、ブラックホールがやってくるまでに下準備を完成させるための狩猟犬、そして、ホワイトホールの子供。人ではなく、限りなく星に近く意思をもたないバケモノ、誘い人と呼ばれるそれは、日本と呼ばれる国と、ごくわずかな国以外を掃除を完了させていた。

また、運良く誘い人の攻撃を回避していた小さな国、日本だったが、来るべきときにそなえるためにそれに対抗すべくある案を提示する。一般人にまぎれた迎撃部隊が優秀な者は都内近くに、各重要都にぽつりぽつり配置され、それをまぎれさせる居城を作り上げた。それはなんとも皮肉な話だが。

夢に向かい勉学に励む、そんな場所。つまり、

【高校】、であった。

【第零部】 “ epilogue ”

ここは、どこだろう。

ゆっくりと目をあける。途端、広々とした海中のような場面が脳に映し出される。

ぽっかりと浮かぶすべての幻想。

どろりとしたグレーの掛かった青、上を見上げれば白と緑のコントラストステンドグラス。

そんな絵の中のような場所をゆらゆら、ゆらゆらと薄い膜のような泡に包まれながら上がるでも沈むでもなくゆれていた。

体育座りのまま、自分の感情も肉体もそのゆったりとした心地良いリズムに捕われ、またゆっくりとまぶたが重くなっていく。

ここがどこか。自分は誰なのか。

眠気と戦っている鈍い頭では、もうどうでもいいように感じる。そっと流れに身を任せ、まぶたを閉じようとしたとき。

『これは、君の望んだ結末なの？』

ブリツと、その声を聞いた途端に体中に電流が走ったように感じた。すべてを包んでいた海にヒビが入る。

ほどよい眠気をしびれがさらっていく。打ち引いていく波のように、高くにあった波は、引き際に沢山のを引き連れていってしまう。それを不快に思ったがはいか、目蓋を薄く開けて零すように鋭く矢のような言葉を投げかける。

「そんなわけないだろう。僕は運命っていうの、嫌いだから」

言い放った言葉を聞いて、声の主は鼻で笑う。

それが鍵となつたのか。

暖かくも冷たい海がひびがわれたところからがらと音をたてて崩れ始める。

水だとおもっていたものは運命、光だと思っていたものはただの妄想、つたない明かり。泡と思っていたのは、幻想。運命の代わりに肉体が生まれ、妄想のかわりに自我が生まれて。そして幻想のかわりに、現実が零れ落ちる。

「ねえ、君もそうだろうか？」

どれも僕の否定したかったものだった。優しくもなにもない、ただの『必然』。

ピースがこぼれるように運命の海の雨にまみれ、悲しい笑みを形作った僕の顔は、手のひらでさわってみてもひんやりと冷たい。まるでその雨は、なにもない僕の涙、のようだった。

最後に大きな鋭い音を立てて、理想は崩れ落ち、僕が生まれた。

底なしと思われた漆黒に、ふわりと降り立ち、ゆっくりと顔を上げる。その内には、もうひとり。

その姿を認めて静かに微笑む。きつと。いや、多分。

「こうなる事は運命だったんだよ」

偶然か、それとも必然か。

声が重なり笑いがこぼれた。

【第壹部】繰り返し / 1

冷たい美術室の床、眠りの渦から目覚めると、ずっと座っていた反動で腰骨が痛くなる。

ぼんやりとする頭で痛みをしかめていると、すぐに待っていたかのような足音が響いていく。

どんな夢を見ていたのか、どんな内容だったのか。そんなことも思い出せずもやもやとする気持ち。

何か大切なことだったような、そうでもないような。それよりも何が退屈の念が押ししてくる。

「ねえ、知ってる？」

そんなことを考えている間に足音は近くに迫っていた。話し声もはつきりと聞き取れるぐらいだ。軽いこつこつとやけに響いているように感じる上履きの足音は、2人で談話をしながら部活動に行く女学生のものだらう。美術室を通れば、体育館とよばれる場所はずそこだ。

美術部の扉に頭を寄せ、見つからないようにそつと話を伺う。多分、この声は同級生の女子バスケット部だったか。いや、確証はないが。そつとどうでもいいような気持ちを持ちながら退屈を免れようと、欠伸を先ほどからかみ殺しているが、どうにも人間の心理として、自分が退屈だと思わないものをしないと退屈は抜け出してくれないようだ。

「知ってる、この美術部の噂でしょお？」

『1』。

この、といわれてしまった。美術部員としてなんだろうが、もう笑うしかない。心の中一つ笑みを浮かべると、ふわっと欠伸も同時に

出る。

これにも苦笑しかない。

しばらくすると、また声が聞こえてきた。

七不思議のような、さまざまな【ウワサ】。

「下校時刻過ぎても戻らない生徒、厳しい部活制限、夜中の美術室からの声……」

随分大きく嘯かれているようで。ああ、しかしどれものを射ているな、と他人事のようにぼうつと聞いていた。立ち往生している女子の声を聞いていると、不思議と眠くなっていく。まるで何かの呪文に掛かったように。

暫くうつらうつらと心地いい眠りと覚醒の淵をさまよいながら、声が遠ざかっていくのを聞いて、そこからまた意識がぽっかりと浮かび上がってくる。そして、違和感を覚えた。

「おい、待てよ」

ちよつと、待て。 独り扉にしゃがんだままに手を額に当て目を見開き、思案する。

何故、何故……、いや、どうして何故、『一般人にバレているのか』……。

確かにこの部活、もとい【美術部】は、普通の部活ではない。というより、部活動という仮の仕切りで自分の身を隠している。

本当は、世界を守る正義気取りの……いや、率直に【迎撃部隊】、といったほうがはいか。

これについては……ああ、いや、これはあいつ等も交えて復習させるか。

そう思い立ち、やっとのことで”ルーナ”は、すっかりぬるくなつた床から立ち上がる。

ずっと座っていたからとはいえ、鋭く刺さる冷たさの余韻にルーナは顔を暫くしかめ、血の気のないように感じる銀髪一（染めているのだろうか）をふわりとなびかせて部員が固まってなにやら話している方をにらむ。

獣のような金色の眼はしばらくそのまま静止していたが、やがて空を舞うように焦点がずれていき、短いため息の後、一瞬姿を消す。ため息と同タイミングの瞬き。

かちゃ、と小さくベージュの入ったようなラメの入った赤ピンクのめがねを上へ上げ…そして。

つかつかと踵を鳴らしながら楽しそうに雑談する中に加わるのだった。

【第壹部】繰り返し / 2

「さあ、そこに直れ」

ルーナが厳しい面持ちでこちらを凝視するのを、随分下から僕、
“リラッサ”は見上げていた。今、仁王立ちしてるルーナと向かい合
ってキツチリと正座中なのだ。視線の差が痛い。

きついまなざしでにらみをきかすめがねのポニーテイルは、僕のほ
かの2人、“アキ”と“サミホ”を一瞥する。

前に垂れる長い余分なライトブラウンの髪的位置がおかしくて少し
くすぐったいけど……ルーナも大分カリカリしてるし、直すのは我
慢しよう。

それより、そのルーナの機嫌を大幅に悪くしているのが、アキとサ
ミホ。この二人を何とかしないと僕まで酷い仕打ちに合うことは長
い付き合いの僕にはお見通しだった。というか鮮明に思い出せる。

こういうとき、絶対まったくといって良い思い出がないのだ。叱ら
れる時点で良い思い出とは言いにくいけど。

アキはサミホと同じでキャラ被りはしたくないと言って入れたカラ
ーコンタクトの色、赤がかったピンク色の眼を退屈に染めて、また
その黒髪をみながらまたどうでもいいことを考えているだろう、赤
のかかった白髪を揺らす暗い紫の眼のサミホ。

どちらも大変退屈そうで見ているとこっちがハラハラする。という
か僕の命も掛かっているんだから、と髪の色より幾分暗いダークブ
라운の僕の眼は意味もなく潤みだす。泣き落としが通じるような
相手じゃないんだけど……。

「リラッサ！子犬のような目をしない！」

自分ではしているつもりはなかったのだが……、案の定ルーナに指摘され、目元をうでで軽くこすって直す。

ルーナは一つ咳払いをするとたるそうにしているアキとサミホに眼を効かせながらめがねの位置を直す。

そして、不気味な笑みを残しながら本題に入る。

「さて……、昨日何があったか話してもらおうか？

何故、一般生徒にばれているのか。その理由を……！」

ルーナ、顔怖い。般若（般若は女性です）のようだよ。

そんな言葉を飲み込んで右のアキを見つめたルーナを見上げる。どうやら右から順に言うらしい。

アキは一つ癩にさわるようなあくびをもらすと眠そうに話し始める。

「俺は普通にザコぶつ殺したただけだぜ？血もそれほど多大じゃなかったし処理はしなかったけど」

「……それだ」

アキがサミホに同意を求めるようになあ？と聞くと、サミホはどうでもいいような顔をしながらこくん、と頷く。しかし、これで解決と言った具合にすぐさま頭痛を感じたのかルーナが頭を抱えて眉間を人差し指で押さえる。

そして、暫くうんうんとうなっていたが、次に僕の方を向いた。次は真ん中に座る僕らしい、当たり前だけど。

僕はちよつと固まって、この前の行動を思い返す……。

そして、1つ暗い海中にあるような記憶の図書館から一冊の記憶を取り出すと、ピツタリと当てはまるような感覚がする。これだ。

その記憶を掘り起こし、えほんつとわざとらしく堰を交えると、決意したように話し始める。

「えっと……。せ、生徒さんが、困ってた。から、助けた。
……誘い人から」
「それだ……」

またもや、僕が発言した直後、頭を右手で支えるルーナ。もしかしたらルーナは頭が良いから、僕が気づかないような欠点に気がついてしまったのかもしれない。

人助けはいいことだよな？と、僕は自己完結した。

そして、最後に無言でサミホを見やる。

サミホは、視線に気づく、が。

「……………」

……いくら待っても、何も話さない。とつか口すらあけない。……うん、サミホはこういう奴だ。真面目で、頭が良い。ただ、人が大事な話をしていてもまったく別のものすごくどうでもいい事を考えてることが多い。っていうか絶対そう。

そうじゃなかった試しがなかった気がする。……うん、やっぱり記憶にない。きつと今も「モデルガンは当たったらどれ位痛いのか」とか考えてる。絶対。

サミホが的を得た発言をしたらそれは世界の終わりだ。末期だ。終末だ。

そして、だまって様子を見ていたルーナも、また「これだ……」と言って前かがみで暗い顔をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3694ba/>

体育系美術部の滑稽な世界末

2012年1月14日14時49分発行